

平成 27 年 5 月 21 日

総合教育会議会議事録

長岡市



1 日 時 平成 27 年 5 月 21 日 (木曜日)

午前 10 時 30 分から午前 11 時 40 分まで

2 場 所 アオーレ長岡 第二応接室

3 出席者

市 長 森 民夫

教育委員長 大橋 岑生      教育委員 羽賀 友信      教育委員 中村 美和

教育委員 青柳 由美子      教 育 長 加藤 孝博

4 職務のため出席した者

教育部長                      佐藤 伸吉                      子育て支援部長                      若月 和浩

教育総務課長                      武樋 正隆                      学校教育課長                      竹内 正浩

子ども家庭課長                      波多 文子                      学校教育課主幹兼管理指導主事      宮 宏之

5 事務のため出席した者

教育総務課長補佐      水内 智憲                      教育総務課庶務係長      佐藤 裕

## 6 会議の経過

(佐藤教育部長) 第一回総合教育会議を開催する。本日は私、佐藤が会議の進行を務めさせていただく。まず、この会議を主催する森市長から、ごあいさつをお願いしたい。

(森市長) 本日はお集まりいただき感謝申し上げます。この春から新しい教育委員会制度がスタートしたが、私としては、総合教育会議の目標は、大切な教育理念や目標を市長部局と教育委員会とで共有することだと考えている。何より大事なものは、目標をしっかりと立てること。それも、良い子をつくるとか、健康な子をつくるとか抽象的なものではなく、具体的方策に結びつくような目標を確立することが必要である。その目標を実現する手段を考えるのは教育委員会の仕事だと考えているが、例えば体験学習を重視するといったものは手段として書き込んでもいいと思う。とにかく、皆さんからは、忌憚の無い意見をお願いしたい。

(佐藤教育部長) 早速、議事に入る。本日の議題は2つある。1番目の議題は、長岡市総合教育会議設置要綱案についてである。これについては、傍聴の手続きや議事録の公表の仕方について規定しているものである。事前に目を通していただいていると思うが、皆さんから意見等はあるか。

〔特になし〕

(佐藤教育部長) 特に異論がないので、案のとおり要綱を定め、これに則り、会議を運営させていただく。

それでは、議題の2番目に入る。議題は教育の大綱の策定についてである。4月に開催した事前懇談会で皆さんからいろいろな意見をいただいたが、その意見を整理し、テーマとしてまとめたものを本日お配りした。前回の懇談会では、市民のニーズを踏まえた上で、議論を進めたいということであったので、2ページ目以降については、保護者アンケート、その他の参考資料になっている。これらを参考にした上で議論を進めていきたい。4つの検討テーマを設定してあるが、ここから違うテーマに発展していくこともあり得ると思うので、よろしくをお願いしたい。では、1番目のテーマの「子どもたちに身に付けさせたい力について」であるが、資料1をご覧ください。これは、平成25年度に行われた長岡市の児童生徒・保護者・教員意識調査の保護者の調査結果である。小中学校の教育でどんな力を身につけさ

せることを期待しているか、という質問に対して、長岡市内の保護者は、読み書き・計算などの基礎学力以上に、友達を作ることや他人とのコミュニケーション能力、決まり・ルールを守る意識や、他人を思いやる心などの、いわば社会性や人間性、道徳性を学校で身につけてもらいたいという親が多いということが分かる。この結果についての意見をいただきながら、子ども達に身につけさせたい力について議論をお願いしたい。

(青柳委員) 基礎学力よりも、まず、決まりを守ったり、友達との関わりを大切にすることを学んでほしいという親の心が伝わってくる。ルールを守ろうという意識を高めたいというのは、どういうことに繋がるのか、親が子どもにどんな願いをかけて教育したいのかと考えたときに、これらの体験や経験を通して、自ら問題解決をする力が育ってほしいということではないかと考える。それにはコミュニケーション能力も大切である。そこで、大人がどんなタイミングで関わり、手を貸すのかということが大切になってくるのだと思う。例えば、いじめなどの問題は早急な対応が必要になってくるが、全てのことに大人が手を貸してしまえば、子どもの問題解決能力は育たず、大人になってからも自発的な行動力が欠けたままになってしまうのではないかと。そうならないために、自発的な問題解決能力が育つことを期待するのが保護者の気持ちであると感じた。

(中村委員) 一昔前は、読み書き・計算などの基礎学力を学校に望むものだった。青柳委員がおっしゃっているように、コミュニケーション能力などを望む割合が高くなっているというのは、それだけ、その能力が生活の中で不足していて、親もそれを悩んでいるのが感じ取られる。親世代が子どもだった頃は、コミュニケーション能力についてなど考えたことが無いくらいに、地域の人に挨拶ができたり、学校でも友達と仲良く遊んだりしていたし、多少の友達同士のけんかがあっても、それが事件に繋がるようなことはそんなに無かったように思う。しかし、今回のアンケートから、現代の悩ましい状況が良く分かると感じた。

(大橋委員長) やはり、読み書き能力は必要で、これをベースにおかないといけな  
いと考える。子どものアンケート結果に、子どもが勉強の中で、何をやりたいと思  
っているかというのが載っている。面白いと思うのが、自分の将来の夢を実現する  
ために今勉強しなければいけない、そして、高校や大学へ行くことも大事、それが

大人になったときに役立つと、特に小学生は考えている。中学生になると、一番多いのが、将来自分の夢を実現するために大切だと答えていて、高校や大学に行くというのも、差し迫った身近なこととして数としては増えている。ただし、学校訪問の際もそう思うのだが、読み書き学習の中に、自分で問題解決をしながら取り組んでいく真剣な学びの姿も見受けられるし、そういった意味では、これからも、読み書きの力をつけながら、仲間とともに、自分のこれからを考える子どもを育てていきたい。その上で、社会性やコミュニケーション能力をつけていくものなのだと思う。

(羽賀委員) 長岡の保護者の特性は、学力を単なる定量的な評価にせず、広い意味で捉えていることである。さらにその後ろにあるものを大事にしなければならないと思う。それは、夢を作るとか、志を持つとか、こういったものは長岡の教育特性なのではないか。そういう子どもをつくるために行う政策というのをこれから考えていくわけだが、自ら学ぶというのは大きな課題であり、それがこの中に盛り込まれていると感じた。

(加藤教育長) このアンケートについて、私はこう考える。親は、読み書き・計算の基礎学力はもちろん、それ以上のことを求めている。決して読み書き・計算能力を軽視しているわけではないと思う。長岡の先生の頑張りがあって、長岡の子ども達の学力はある程度納得できる水準であって、当たり前のことになっており、それ以上に人間性や道徳性を大事にしたいというような意味なのではないかと考える。

私は、今朝ここに来る前に、中学生の陸上大会の開会式に出席し、その姿を褒めて来たところだ。集合のアナウンスが無かったにも関わらず、時間を見てきちんと集まっていた。挨拶のときも頭ひとつ動かない。最近の中学生はすごい。今年の長岡市と出雲崎町の中学生は、これでスタートしたのだから、相当なことができると期待していると言って来たところだった。そういう面を、保護者にも、子育てが終わった年配の方にも見てもらいたい。そういうところを伸ばしていければ良いと思う。

(中村委員) 私の子供が中学生だったとき、陸上の顧問の先生が、「強い選手になれ」と指導していた。速い、遅いではなく、「強い」というのは、精神的に強くなれとか、記録が良くなったときでも自分を振り返って、さらに上を目指すような選

手になれというものだった。リレーなど複数で行う競技で協力しあえる精神、例えば体調が悪くてもめげずに頑張ろうとするような精神力を指導されていたのに感動した。生徒達も、それぞれ成果を出していたので、素晴らしい先生がいるなど感じていた。それだけでなく、普段の授業などでもそういったものが子ども達に伝わっていてとても良いなと思った。

(大橋委員長) 長岡の子どもたちは、学習についても、非常に真剣に取り組んでいるという姿勢が見て取れる。それは学校訪問の際も感じるし、自分なりにしっかり考えようとか、自分なりの目標を立てて粘り強く頑張っていこうとしている姿が見えるのが嬉しい。それが、自分の夢や志に向けて自分なりに頑張っていくことに繋がっていくのだと思う。

(青柳委員) 夢ということ言えば、早くから自分の夢を持てる子どもは幸せだと思う。自分自身を振り返ったときに、自分にも大きな夢があったが、それが叶わないと思ったときに、夢が消えてしまった。その後は、別の夢を持つようになっていたのだが、早い頃から夢を持っている子どもは良いが、夢を見つけられない子どもに対してどんな働きかけができるのかというのを近頃考えている。

(羽賀委員) 私も良くそのことについて考える。夢を持つのにも、相当な力がある。目標設定をしていけば、夢に段々近づいていくだろうし、その向こうに夢があるとわかれば良いと思う。学びが目的ではなく、学びの先にあるものが目的であるということが分かるようになると良いと思う。

(森市長) 全体としては、今出た意見と、私自身の気持ちは一緒である。これ以上付け加えることは無いが、1つ違った視点を入れるとすれば、都会と違って全て公立の小中学校であるということだと思う。その部分で難しさというのがある。保護者のアンケート結果は、正直な保護者の気持ちが結果に出ているのだと思うが、例えば、外国語能力など国際化に対応できる力とか、高校や大学などに進学するために必要な高度な学力などそれぞれ10パーセントを占めており、ちゃんと実態を反映しているのだと思う。その10パーセントを切り捨てることはできない。そうすると、公教育と、塾などプラスアルファの部分の組み合わせという話にも結びついていくように思う。トータルとして、コミュニケーション能力や社会性やルールを守ろうとする意識に対して高い要望が出てくるというのは、安易に言うてはいけ

ないかもしれないが、健全な実態を反映しているのではないかと感じる。それから、学力がある程度ないとコミュニケーション能力も育たないというのも事実ではないか。基本的には全て結びついてくる。しかし、コミュニケーション能力とか、ルールを守ろうとする意識を育てるために必要な学力は基礎的なもので、それほど高度なものではないのだろうと思う。ただ、行政として見たときに、公教育には、公平性が重要である。高度な学力を求めていくのに向いている子どもも勿論いるし、そういった子どもを特別に補習するというのも悪くない、と時々思うが、その議論を始めると能力別のクラス編成という話になってしまうのかなと思う。

(大橋委員長) 長岡の「熱中！感動！夢づくり教育」のなかに、イングリッシュアカデミーや、数学アカデミーだとか、フォートワースに子ども達を派遣するというのがあるが、学校でも家庭でも、そういう機会に結び付けてあげていければ良いのではないか。

(森市長) 高度な教育も選択することができるということだ。そうすると、「熱中！感動！夢づくり教育」の広報の仕方も大事になってくる。

(羽賀委員) 公教育の中で、社会教育が、その枠組みを支えているというのは長岡の教育の特徴であり、素晴らしいところだと思っている。

(森市長) 東京の人と話をしていると、東京と長岡の決定的な違いは、東京は私立が多いところだと感じる。極端なことを言えば、成績優秀な子どもはほとんど私立に行ってしまう。公立には、ずば抜けた子どもはいなくなって、その中で社会を作っている。意欲のある子どもの多くが私立に行ってしまうので、東京の公立学校の先生と、長岡の公立学校の先生は全く大変さが違うということの一つ理解しておいても良いと思う。

(加藤教育長) 東京の教育長と話していてもそんな話になった。6割程度は私立に進学するというので、私立に行かなかった子ども達を何とかしなくてはならないということで大変だということだった。

(森市長) 中央教育審議会は、完全に東京ベースの議論になっている。議論に参加する人たちも、学校の成績が良くて、今の地位にある人たちで、マスコミも含めてそうなので、そこにも言及していく必要はあるのではないかと考えている。そうすると、「熱中！感動！夢づくり教育」の価値が出てきて、どういう切り口で「熱中！

感動！夢づくり」を位置づけていくかというように、かなり高度な大綱になる。今後議論の参考になればと思う。

(大橋委員長) 話は変わるが、栃尾のとある学校が、授業のなかで、ふるさとの宝を大切にすることを趣旨として、学習・発表をするという取組みを行った。校長先生も言っていたが、子ども達が生き生きとして、これまで知らなかった栃尾の良さを発見できたということだった。それぞれのふるさとの良さを発見していくというのが、子ども達にとっては大事だと感じた。

(青柳委員) 郷土のことを研究して、幼いうちから郷土に馴染み、郷土を愛し、地域に認められて育った子ども達というのは、大人になって自分の郷土を語れるようになると思う。

(森市長) 本当にそうだ。良いことを話していただいた。

(羽賀委員) 地域に愛着を持つことはとても大事なことだと思う。例えば、姉妹都市のフォートワース市やハワイ・ホノルル市に行った子ども達が、世界を見てくるわけだが、世界を見ると、長岡がよく見えてくるという。そこから地域おこしに興味を持つ子どもが多い。そこが長岡の高度な教育の特徴だと思う。

(森市長) もう一つ申し上げたいのは、アンケートの回答で「将来自分の夢を実現するために大切だと思うから」とか、「大人になったときに役立つと思うから」や、「わかると楽しいし、もっと力・自信をつけたいから」の3つは基本的には同じ方向性であると思う。「勉強しなさいといわれるから」とか、「テストで良い点をとるため」というのがその対極である。「自分の行きたい高校や大学へ行くため」というのは、一概に否定するようなものではないが、目標がそこで止まってしまうという意味で、その先を見ていない。特に中学、高校の教育が2、3年先のところに目標を置く教育になってしまっていて、将来何になりたいというのが置き去りにされているのではないか。医者になりたいから医学部に行くなどは良いと思うが。小学校・中学校では、夢で良いと思うが、ある程度先を考えた、目標を立てるよう強調していきたい。それは、未来を育む教育だと思う。今の教育を否定するつもりもないし、先生方の努力は勿論認めている。目先の目標がほとんど絶対化されている傾向はないか。

(青柳委員) 市長のおっしゃるようなことを私も感じていた。「福祉やボランティ

アを通じた社会貢献意欲」がとても低い。ここが低いところに着目すべきである。平成 18 年度と比較しても更に下がっている。なぜ低下しているのかというところまで考えて、人は誰かを喜ばせるために生きているという実感をもってほしい。私たちも、震災を経験して、震災翌日から、自衛隊の方が来てくれたり、いろんな人たちが、いろんな形で働きかけをしてくれて、私達の生活が成り立っているのだということを実感した。子ども達にも、大学に入ることが目標ではなく、大学を出た後どうしたいのか、どんな形で自分が身につけた力で社会貢献をしていくのかというところまで考えていける力をもってもらいたい。

(中村委員) 私も同感である。将来、自分がどうなりたいか、どうやって生きていきたいか、それこそ、死ぬときはどんな想いでというところまで、長い目で人生を見たときに、例えば医者になって人を助けたいので、そのために勉強しなくては、となるのだろう。やはり、人は誰かに認められたいという心理があって、その想いが全てではないが、そこから社会貢献や福祉・ボランティアで、どんな知識をつけて、どんなことをしていこうかという想いが生まれてくると思う。まずは、自分がありのままにどういう人間かを知り、自分ができる最大限のことをできるような人間づくりをしていけたら良いと思う。自尊心・自己肯定感をしっかり持てると、それが将来につながると思う。

(大橋委員長) 「熱中！感動！夢づくり教育」の多種多様な活動に参加することで経験を積んでいくことが、中村委員のいうようなことに繋がっていくだろう。そのために地域や学校の応援体制にも関わるが、そういうところがしっかりしている所の子どもは生き生きとして、良い形で成長していると思う。

(加藤教育長) 教育委員会は、特別支援学校を含め義務教育の公立学校をカバーしている。「高校や大学に行くために勉強する」という発想に関わって、日本教育の癌は大学入試だと思う。経験からもそう思うのだが、ようやく高大接続で、文部科学省が中央教育審議会特別委員会で取組み始めたところであり、大学などは今後どうなっていくのかヒヤヒヤしているところだと思う。そこをしっかりとってもらわないと、せっかく義務教育で、いろんな体験をさせながら目標を持とう、夢を持とう、大学合格の目先のことにとらわれてはいけないという教育をしても、現実とそぐわない。大学入試の改革をしっかりとってほしいと思っている。そうしないと、義務

教育で頑張っ取り組んでも、成果があがってこないという気がしている。特に、小学校低学年の先生などは、大変努力してもらっていると思う。日本の教育の強みは、初等・中等教育にある。

(羽賀委員) 「熱中！感動！夢づくり教育」でシステムを作っても、子ども自身が興味を示さなければ、機能しないのと一緒にである。先生方は、子ども達をそこに向ける教育をしてくれて、体験学習は、経験や人との関わりや人の痛み、喜びを知ることができ、とても良いと思う。その経験をつないでいかななくてはいけないし、システムと人材教育は両輪でなくてはならない。それが今の長岡の教育の道筋になるのではないか。

(大橋委員長) 中学校が終わり、高校・大学に進学した先輩が、小学生に関わって、指導してくれたりというケースも出始めている。

(青柳委員) ロボコンなどがそうである。

(大橋委員長) とても大事なことであると思う。そういったものを長岡流につなげていく機会を大事にしていきたい。スポーツなども、それぞれの地域で非常に一生懸命に取り組んでいる。地域の力が、青少年のスポーツ活動を底上げしてくれているし、大会でも良い成績を残している。これが、一部の地域だけではなく、多くの地域に広がってほしいと思う。

(加藤教育長) これからは、学校だけの教育では限界がある。地域、家庭、学校の三者が役割を明確にし、スクラムを組んでいかねばならない。昔から、知徳体という言葉をよく言ってきたが、「知」は最近日本人もノーベル賞など受賞したりしているが、「体」はオリンピックや世界選手権で金メダルを獲ることだとすると、「徳」は、誰が金メダルを与えているだろうか。生活の中で、やさしく、思いやりを持っているとか、心の豊かな子を誰が褒めて伸ばしてやれているか。案外その部分は注目してこなかった。「知」、「体」でずば抜けていなくても、「徳」で伸ばせるということはあるはずである。一人ひとりの実態を見て、良いところを見つけて、引き出していくのが我々の仕事だと思う。地域の人が褒めてあげるのも大切である。

(青柳委員) 私自身の体験になるが、小学生の頃、毎朝学校に行く前に、玄関周りを掃き掃除するのが私の仕事だった。それを出勤していく近所の人が見ていて、それを褒めてもらったことがあった。見ていてくれる人がいたということがすごく嬉

しくて、それが自信や心の支えになっていた。

(羽賀委員) 自分のことを振り返ると、小学校4～6年生の間、私も家の前を掃き掃除していた。時間が余るので、町内を掃いて回っていたら、6年生の時、それが新潟日報の記事に載ったことがあった。校長先生からも褒められて、その経験が今の自分の社会性を作っていると思う。あの頃の自分に恥じるような行いはしたくないという動機付けになっているのかもしれない。経験と、人の心を褒めてやるというシステムが長岡の教育に入ってくればもっと良くなると思う。

(森市長) まったくおっしゃる通りだと思うが、1つ考えなくてはいけないのが、このアンケートを書いた保護者も、子ども達も、自分なりに良い成績になりたいという気持ちはあるはずだということである。ずば抜けて良い成績ということではなくても、学校なのだから根っこにあるのは学力であると思う。体験学習も、人間の幅を広げる上で大切なことだが、思い出すと、原点は目標がなければ勉強しないということだったはず。高校の先生に、どうやったら英語の成績が上がるのかと聞いたら、「必要があればすぐ勉強するようになる」と言われた。現実には、それが無ければ生きるか死ぬかという経験をすれば、勉強せざるを得ない。要するに、英語を勉強すれば、どんな可能性が広がるか、どんな利点があるかをきちんと理解すれば、全員ではなくても、勉強する子どもは出てくる。あるいは、勉強はできなくても、人をまとめる能力はあるというのを自覚して、そちらの勉強をして、ボランティア系の大学に行くとか、目標をきちんと立てて、経験を積んで、人間性を豊かにするというのも良いけれど、それによって学力も上がっていくことも発信していかないと理解されないのではないかと。基礎学力プラスアルファ、つまり人と付き合っていくのに必要な学力をつけたい。人付き合いは教養があってできるものだと思う。勿論、学力至上主義は否定していく。教え込めば学力が上がるとか、先生のテクニックがよければ学力が向上するというものでもない、と私は思っている。塾の先生ほど楽なことはない。しかし、マスコミは、スキル面ばかり取り上げて、塾の先生をもてはやしがちである。高いお金を払って、大学に入るという明確な目標・意欲があって集まってくる子どもを教えるのは簡単なことだ。問題は、意欲も無く、自分なんて駄目だとあきらめている子どもをどう教えるか、ということである。そこが公立学校の先生は大変だと思う。そういう意味で、学力至上主義の風潮を否定す

べきだと思っているが、一方で、気持ちの底で学力は大事だということを、体験や目標・夢を持つことが学力の向上につながるということを言いたい。脳科学者の茂木健一郎さんが「感動をすると脳は発達する」と言っていた。要するにそういうことだと思う。処理しきれないほどの情報が脳に入ると感動する心になる。例えば、花火を見て、どうしてこんなに綺麗なのだろうと処理し切れない情報が脳に入って感動する。感動によって脳が鍛えられる。なので、「熱中！感動！夢づくり教育」は間違っていないと思っている。

(中村委員) 子どもによって、出会うタイミングも重要だと思う。小中高で成績が良くなくても、専門分野に行ったら、それが向いていて力を発揮できるとか、そういうこともある。

(森市長) 分かりやすいところで、女の子にモテたいというのも勉強の動機になる。好きな女の子が、頭の良い子が好きと言ったら必死に勉強するものだ。そういうタイミングもあるだろう。

(中村委員) そんな風に、タイミングは子どもそれぞれ。子どもの学校時代だけではなく繋がっていても良いと思う。

(大橋委員長) 興味があるのが、「熱中！感動！夢づくり教育」のプログラムに積極的に参加している学校と、意外と参加していない学校とで学力検査の結果にどんな違いがあるのかということである。

(森市長) 私自身、長岡独自の学力調査を作りたいという想いがある。というのも、私が言っている学力と、文部科学省の言う学力は違うとされていて、社会に役立つ知恵のようなものを測ってみたい。他人とコミュニケーションをとる能力を測るようなテストなどはないだろうか。そういうことをやって、結果が見えてくると、説得力が出てくると思う。例えば、コミュニケーション能力に関する学力テストについては、就職試験関係で、大企業などがそういう研究もずいぶんしているという話だ。ペーパーテストではないことが多いが、ペーパーテストもあるのではないかな。

(青柳委員) 東京の私立の幼稚園のテストも面白い。設定があって、こういう時、あなたならどうするかという設問があるようだ。

(森市長) それは良い。そういうものがあるなら実験的にやってみるのも良い。意欲の数値化になる。以前、経済産業省の社会人基礎力の研究会に出たことがあるの

だが、企業は、優秀な学生を採用するのが大変だということで、頭を抱えていた。大学の先生はスキルしか教えられなくて、人間性を教える気持ちは全く無い。高校側は、そういうことまで考えずに大学へ生徒を送り出すわけだが、結果的に就職の段階で、民間企業の力を借りない限り、就職のための力をつけることが現状ではできなくなっている。社会人基礎力という言葉があって、大企業はしっかりチェックしている。その辺りをしっかり勉強してもらい、それを研究していくと「熱中！感動！夢づくり教育」が正しいということの証拠になる。小中学校で身に付けた能力も、就職活動でも役に立つはずだ。企業がほしがっている人材は、長岡で取り組んでいるような、協調性があるとか、独自性があるとか、経験が豊富であるとか、そういう人材だと思う。

(佐藤教育部長) どういう子どもを育てたいか、子どもに身に付けさせたい力はどんなものかについて議論してきたが、最後にこれだけは、というようなことはないか。

(大橋委員長) これからは、防災に関わって「安心・安全」が核になっていくはずだ。長岡は先進地になっているが、教育委員会としても非常に大切になっていくと思う。中越地震のことを振り返りながら、そこに立ち返ることが大事である。また、すぐそばにある原発の問題もそうだが、いつでもきちんと考えておかねばならないことだと思う。

(佐藤教育部長) 子ども達の防災能力も含めてということでしょうか。

(大橋委員長) まさにそうである。

(森市長) 中越地震のときに、教職員が遠くに住んでいることがネックになったと聞いている。校長先生が新潟市の辺りに住んでいて、長岡に来れず、その先生自身がとても悔しがっていた。危機管理ということを含めてとらえると、地域に密着した学校ということになってくると思う。県の広域人事の批判になってしまうかもしれないが、日曜日の行事の時に、校長先生が近くにいないというのは、地域と一体になった学校という軸からいくとどうかと思う。防災の観点でもっと議論すべきことだと感じる。

(大橋委員長) 中学生が、避難訓練をはじめ、地域の防災に参加するのも多くなってきていて、子どものときから、地域と一体になって、自分の役割を果たしたり、

平日に父親不在のところには、駆けつける役割ができている地域もあると聞く。

(森市長) 中越地震を経験した長岡らしくて良いと思う。

(加藤教育長) 市長からも指摘があったとおりだが、地震当時は、長岡の学校の校長・教頭が、長岡に住んでいないという状況があった。それ以降、被災地からの声ということで、県への働きかけを行い、80パーセント程度改善されている。建物などハード面の安全確保については、今年度耐震補強も全て終わる。あとは、ソフト面である。避難訓練などは、授業中が多かったが、最近は、避難後どのように保護者に引き渡すかという訓練を行うようにしている。登下校中に災害が起こった場合どうするのかということまで地域によっては求められている。家に向かえば良いのか、学校に向かえば良いのかなど。これらの要望を汲んだ訓練を、今後工夫していかなければならない。

(中村委員) それは、家庭と地域と学校の連携が非常に重要になってくるだろう。隣にどんな人が住んでいるのか知っておくとか、災害が起こった時には、町内で一人暮らしの方に声を掛けに行くとか、そういう連携ができつつある。そこに更に学校との連携を組み合わせれば、より強固な備えができると思う。

(佐藤教育部長) この件について、他に意見はないか。

〔特になし〕

(佐藤教育部長) 残りのテーマは次回の会議の議題とする。これらについて議論を進め、最終的に大綱の作成につなげていきたい。本日は以上で終了とする。